

# 教員養成教育における図画工作科の模擬授業の充実をめざして

隅 敦

## Enhancement of the Research Lessons of the Arts and Handicrafts Lessons in Teacher Training Education

SUMI Atsushi

Email: sumi@edu.u-toyama.ac.jp

### 【摘要】

全国の小学校では熟達教員の大量退職が進み、採用1年次から授業力を発揮できる若手教員が求められている。実技教科は、児童が好きであるにも関わらず、新規採用教職員研修で取り上げられなかったり、若手教員が他の研修のために授業を持たされなかったりすることもある。また、文部科学省が平成29年度に位置づけた「教職コアカリキュラム」の実施が平成30年度から始まり、小学校の教職課程の必修講義内で模擬授業が位置づけられたこともあり、実技教科においても研究に取り組みされるようになったが、図画工作科の研究本数は極めて少ない。

本研究では、教員養成教育における図画工作科の模擬授業を教材研究として捉え直し、内容を充実させることにより、採用された若手教員が1年次から授業力を発揮するために生かすことのできる模擬授業の在り方を解明することを目的とする。そのために、以下の研究を実施した。1. 図画工作科において、教師役の学生の動画記録を撮影する。2. 模擬授業後の教師役の学生の発話記録のテキストデータを質的分析する。3. 授業後の児童役の学生のレポートを質的分析ソフトを用いて分析を行い、その関連性について整理する。

その結果、1つの模擬授業における教師役の学生の発話をきっかけに、児童役の学生が活動をし教材に対する理解を深めていることから、その重要性がうかがえる。さらに、学生にとっての教材研究としての模擬授業が質的に変化していることが確認でき、大学の講義内におけるその成果を認識することができた。

**キーワード**：教員養成教育、模擬授業、図画工作科、発話、質的データ分析、MAXQDA2020AnalyticsPro2020

**Keywords**：Issues in Art Education, Course of Study Goal, Qualitative Analysis, MAXQDA2020AnalyticsPro2020

### I. はじめに

ここ数年来、全国の学校教育の現場では熟達教員の大量退職に伴い若手教員の割合が増え続け、たとえ採用1年次といえども、授業力のある人材が求められている。

筆者は、これまでに、新規採用から3年間の若手教員の実技教科の授業における発話を分析し、授業力の向上を確認する研究<sup>1</sup>を行った。その結果、採用1年次には新規採用教職員研修において十分に研修を受けられない実態や、そもそも主要教科の研修の時間に置き換えられ、授業を受け持たない実技教科も存在する実態も把握した。こうした状況下で、例えば1年次に指導を行っていない実技教科でも他の教科の指導を応用しながら授業経験を積むことで、2年次以降に授業力は向上していくという結果が出た。

一方、教育実習での指導経験や講義で学習指導案を書いた経験があった題材や単元に関しては、授業の事前準備にさほど抵抗がないことも把握できた。さらに、一部の若手教員が動画配信や実物投影機を使用したプレゼンテーションなどの工夫を導入部に行っている事実も確認した<sup>2</sup>。

次に、導入部と展開部の発話に着目して、学習指導要領に基づく評価観点をクロスさせて質的データ分析を行う研究をしたところ<sup>3</sup>、導入部での発話の質や量が、教科で求められる学力と密接に結びつくことが確認された<sup>4</sup>。そこで、講義シラバスの改善を図り、講義内の模擬授業の振り返りの際に、撮影した動画を基に発話を振り返る時間を位置付けた。したがって、採用された若手教員にとって、実技教科としての図画工作科における授業力発揮のためには

教員養成教育における模擬授業の充実が重要であるという結論が導き出された。

## Ⅱ. 研究にあたって

### (1) 本研究で使用する「授業力」および「教材研究」の位置づけ

#### ①研究仮説

授業内で行う図画工作科の模擬授業を「教材研究」として捉えて分析し、客観的吟味の段階の教材研究から主観的吟味の教材研究を経て、教育的吟味の教材研究へと変容していくことが確認できれば、学生が「授業力」をつけていくのが確認できるのではないかな。

#### ②本研究で使用する授業力について

本研究で用いる授業力を辰野千壽の論<sup>5</sup>にしたがって、「子どもが効果的、能率的に学習するように指導、助言する能力」として、「子供に学力をつけることが前提の学校教育において求められる教員の指導力」と規定する。

そもそも、授業力の定義は、各都道府県等の公の教員研修センター等で出される資料<sup>6</sup>で多数確認することができる。そこでは、例えば「授業を通して、児童生徒に『生きる力』をはぐくむ力」等学校教育の現場では安易に用いられ、学級経営を含む生活指導力を含む定義付けがされている場合もある。そこで、単に授業を実施する力量として定義づけるためには、整理が必要になってくると考えた。

#### ③本研究で使用する「教材研究」について

本研究で用いる教材研究は、1990年にそれを構造的に捉えた理論を示した高久清吉の定義<sup>7</sup>にしたがって、「授業のための事前準備いっさいを含む吟味である」と定義する。彼によると、それは授業の「教授学的吟味」と「方法論的吟味」であり、教授学的吟味を「授業内容に関する吟味」とし、方法論的吟味とは、「教授および学習の実際の方法に関する吟味」とであるとされる。

授業力と同様に新規採用教員を含む現職教員の研修用の資料には教材研究の大切さを説く項目が記載されているが、明確な定義がされていないことが多く<sup>8</sup>、教員研修でもその必要性がある意味自明のこととして説かれることもある<sup>9</sup>。この定義の不明瞭さが、高野が指摘するように「さかのほれば、『教材』の理解のあいまいさに基づくのではないかな」<sup>10</sup>

となり、教員を希望する学生や若手教員に十分に授業力をつけることのできない要因になっていると考えられる。

高久によると教材研究は3つの観点<sup>11</sup>から進められるという。第1は『前の学習成立の客観的要素に対応する本質的な学習内容の吟味』であり、『客観的吟味』とされる。第2は『学習成立の主観的要素に対応し、学習者に焦点を合わせ、この学習者と本質的内容との効果的接点として、どのような興味ある具体的内容、活動を取り上げるかの吟味』であり、『主観的吟味』とされる。第3は『第1と第2の吟味を統合し、本質的内容と補助的、付随的内容・活動との効果的な組み合わせまたは組み立てを問題とする吟味』であり、『教育的吟味』とされる。

本研究では、高久の教材研究の論にそって、たとえ教員養成段階の模擬授業でも教材研究として捉えることで、授業力をつけるための教材研究の在り方を追求したいと考える。

### (2) 研究対象

令和2年度(2020年度)の筆者担当の「図画工作科教育論B」を受講し模擬授業を行った4名の学生が所属する1班

### (3) 先行研究

若手教員の割合が増え続けている状況の中で、その育成に着目した研究は増加傾向にある。内容は主に学級経営や生徒指導などの課題解決や校内研修全般における指導力形成に重点を置いたり(堂前拓耶・2019/室山俊美・2020)、算数科や国語科などのいわゆる主要教科を取り上げたりしている。たとえば、実技教科を取り上げていても、学校教育の現場における若手教員のおかれた実態を踏まえた上での研究とは言えない。

文部科学省が平成29年度に位置づけた「教職コアカリキュラム」の実施が平成30年度から始まり、小学校の教職課程の必修講義内で模擬授業が位置づけられたこともあり、実技教科においても、関連の研究は盛んに行われるようになった。実技教科の模擬授業に関する研究を、CiNiiで検索<sup>12</sup>したところ、音楽では30件、家庭科では81件、体育科では94件であったが図画工作科ではわずか6件であった。これらの研究では、主として、授業後の学生に対するアンケート等を用いた学生の省察を分析した研究が主であり、授業内における教師役の学生の行為に視点を当てた研究は大野内<sup>13</sup>など研究数が極めて

少ないのが実態である。

#### (4) 本研究の分析方法

##### ① 質的データ分析ソフトの活用

本研究では、質的データ分析ソフト<sup>14</sup>を用いて分析を行った。本ソフトは、テキストデータをインポートすることで、統合的に管理することが可能であり、それらの関係性を分析することが容易になる。また、必要に応じて分析結果をマップやブラウザに置き換えたり、表計算ソフトやワープロソフトのファイルにエクスポートしてグラフ化するなどの視覚情報に置き換えたりすることも可能<sup>15</sup>であり、本研究では、これらの機能からコードマップを使用することにした。コードマップ内では、各円はコードを表しており、2つのコード間の距離は、データマテリアルでコードがどのように適用されているかを表し、円が大きいほどそのコードで行われるコード割り当てが多くなっていることを示している。さらに、コード間の接続線はどのコードが重複または共起するかを示し、2つのコードの間に一致があるほど接続線が太く表示されている。

##### ② 分析の手順

まず、教師役の学生の発話のテキストデータ他、以下のデータ（\*模擬授業の動画（教師役を撮影したタブレット端末の動画、\*模擬授業が行われているグループ全体を撮影した固定ビデオカメラの動画、教師役の学生の頭部に装着したウェアラブルカメラで撮影した児童役の学生の動画、授業後に学生自身が発話を記録した、「授業レポート」「講義レポート」のテキストデータ）をインポートし、次の観点で模擬授業の実態を把握することにした。

まず、児童役の学生の題材レポートの評価の3観点の見直しの記述から、各自が身についたと判断した資質・能力の抽出を観点別に行う。次に教師役の学生の発話のテキストデータを元にして、資質・能力の観点に関連のある発話のセグメントをコーディングする。その後、模擬授業を撮影した動画から、発話以外の板書やワークシート、作品例などの主として環境設定に属するコードを作成し分類する。この過程で、たとえ模擬授業であっても、学校教育の現場で求める資質・能力を身につけるための授業力を向上させるための要素が含まれることを確認していった。

#### ③ 分析コードの設定

##### A. 発話分析コードセット

本コードは、筆者が過去に行った研究<sup>16</sup>で使用したものであり、若手教員の実技教科の授業分析を行った際にその発話から導き出したもの<sup>17</sup>である。

##### I. 評価観点コードセット

本コードは、「第2回図画工作科教育論B」<sup>18</sup>で実施した模擬授業の題材「くぎうちトントン」の評価観点であり、日本文教出版の図画工作科教科書の資料として、ホームページ上で配布されている「題材別カリキュラム」<sup>19</sup>から本題材の観点ごとに説明つけた<sup>20</sup>。

表1 教材研究コードセット

コード	セグメントの説明
客観的吟味としての教材研究	前の学習成立の客観的要素に対応する本質的な学習内容の吟味
主観的吟味としての教材研究	学習成立の主観的要素に対応し、学習者に焦点を合わせ、この学習者と本質的内容との効果的接点として、どのような興味ある具体的内容、活動を取り上げるかの吟味
教育的吟味としての教材研究	教育的吟味と主観的を統合し、本質的内容と補助的、付随的内容・活動との効果的な組み合わせまたは組み立てを問題とする吟味

本コードは、前出の高久の論から3つの教材研究の段階を設定し、それらの説明を加えたものである。その内容に当たる発話を位置づけていった。

### Ⅲ. 分析の実際

#### (1) 分析コードによるコーディング

##### ① 発話分析コードによるコーディングをしたセグメント例

表2 発話分析コードセットによるコーディングしたセグメント例

文書名(学生)	コード	セグメント
模擬授業発話(A)	指示	そしたら、あと1分ぐらいしたら発表の時間にしようか。

模擬授業発話 (A)	示範	こっち側がちょっと丸くなってるから、この丸くなっている方で、こう、たたいてあげると、こんなふうに真っすぐ木に刺さってくれます。今日はこんなふうに釘と玄能を使って、みんなで作品を作ってみようと思います。それじゃあ席に1回戻ってください
模擬授業発話 (A)	質問	これ、斜めに打つてみたの
模擬授業発話 (A)	同意（活動賞賛）	すごい。細いところに打つてってるんだね
模擬授業発話 (A)	同意（活動承認）	そっか。花びらみたいに見えるなって思ったんだね
題材レポート (B)	同意（活動奨励）	そのため、積極的に取り組む生徒の裏で、あまり作業が進まない児童に対する声掛けが必要であると感じた
講義レポート (C)	示範	授業者が、くぎを抜く際の注意点やコツを活動に入る前に丁寧に教えてくれたため
講義レポート (D)	示範	活動に入る前に、先生が道具の正しい使い方や名称を教示してくれたことで、安心教師役の学生の発話を中心にした分析からして活動に取り組めた
講義レポート (D)	同意（活動承認）	思ったように釘を打つことができなかつた場面においても、活動承認的な声かけをしてくれたため、児童役をしていても積極的に活動に取り組めた
題材レポート (B)	示範	また、事前の説明によって、正しい方法を学び、実践することができた。

表2は、発話に関するコーディングセグメントの一部を抽出して表にしたものである。模擬授業の発話は教師役の学生（A）が実際に児童役に発した内容をテキスト化しており、他の講義レポートおよび題材レポートでのコーディングされたセグメントは、児童役の子がその教師役の学生の発話をどのように受け止めているか判断して抽出した。例えば、題材レポート（B）の「また、事前の説明によって、正しい方法を学び、実践することができた」は、教師役の学生（A）の示範にコーディングした発話が、

児童役Bの活動を支えていることを示している。

## ②評価観点コードセットによるコーディングをしたセグメント例

表3 評価観点コードセットによるコーディングをしたセグメント例

文書名	コード	セグメント
模擬授業発話 (A)	知識・技能	こっち側がちょっと丸くなってるから、この丸くなっている方で、こう、たたいてあげると、こんなふうに真っすぐ木に刺さってくれます。
講義レポート (A)	知識・技能	ペンチやラジオペンチ、くぎ抜きなど釘を抜く方法も複数あり、釘を打つ方法も1つではないことに気づき、場合に応じて適切に用具を用いて、釘を抜くことができた
題材レポート (A)	主体的に学習に取り組む態度	トントントンというげんのうの音を楽しんだり、釘がどンドン気に刺さっていく様子を楽しんだり、げんのうや木、釘を使って工作に表すことを自分なりの角度で楽しむことができた
講義レポート (B)	知識・技能	まっすぐにならないからと言ってやる気をなくしてしまわないように、正しい釘の打ち方を教えると同時に、とにかく積極的に取り組むことや、いろいろな釘の打ち方の個性を褒めてあげるということが重要なのではないかと考えた
題材レポート (B)	思考・判断・表現	作成する中で、「もっとこうしたらいいんじゃないか？」というアイデアが出てきたので、さらに工夫を重ねながら作ることができた
講義レポート (C)	知識・技能	そのため、活動中にくぎが曲がったり、木材を貫通してしまったりしても、自分の力で安全にくぎを抜くことができた
題材レポート (C)	主体的に学習に取り組む態度	活動を楽しみながら、つくりだす喜びを味わい、金づちを使い、くぎを打ち付けて自分の表したいものを表現する活動に取り組むことができた。

講義レポート (D)	知識・技能	活動に入る前に、先生が道具の正しい使い方や名称を教示してくれたことで、安心して活動に取り組めた
題材レポート (D)	思考・判断・表現	あえて真っ直ぐに打ち込むところと斜めに打つところを分け、打った釘の数が増えていくにつれて何を表そうか考えを変えていくことができた

表3は、評価の観点に関するコーディングセグメントの一部を抽出して表にしたものである。

ここでは、実際に両口げんのうで釘を打つことを通して、児童役の学生(C)が、「活動に入る前に、先生が道具の正しい使い方や名称を教示してくれたことで、安心して活動に取り組めた」と述べており、このセグメントは「知識・技能」に分類されたことから、教師役の学生(A)の指導が成果があったことを示している。一方、教師役の学生(A)が、児童役の学生に指導をしながらも、「トントントンというげんのうの音を楽しんだり・・・」と講義レポートの中で、「主体的に学習に取り組む態度」に分類できる文章表現をしている。

### ③教材研究コードセットによるコーディングをしたセグメント例

表4 教材コードセットによるコーディングをしたセグメント例

文書名	コード	セグメント
模擬授業発 (A)	教育的吟味としての教材研究	それで、今は釘抜きの方だったんだけど、こっちのベンチのときは、ここ、頭、釘の頭のところを挟んであげて、上にぎゅっと引っ張ってあげる
講義レポート (A)	主観的吟味としての教材研究	打つ回数や釘の長さを変えるなどして、木から飛び出る部分の長さを変えたり、まっすぐ打つだけでなく、斜めに打ち込んで花びらを表現したりと表現が広がった
題材レポート (A)	客観的吟味としての教材研究	学習指導要領に“絵や立体、工作に表す活動を通して、材料や用具を適切に扱うとともに、前学年までの材料や用具についての経験を生かし、手や体全体を十分に働かせ、表したいことに合わせて表し方を工夫して表すこと。”とあるように、この題材では、用具の適切な使い方を児童に身に付けさせることができると考える。

講義レポート (B)	教育的吟味としての教材研究	釘をまっすぐに打ち込むというのは、大学生の自分でも容易なことではなかったので、小学生が実際に行ったときに、さらに難しいのではないかと思った
題材レポート (B)	教育的吟味としての教材研究	やはり、重要になってくるのは、実践であるので、机間指導が主になってくると思うが、その際の声掛けで何を言うべきか、がとても難しいと感じた。
講義レポート (C)	主観的吟味としての教材研究	くぎを木材に打ち付けることを通して、くぎが木材の中に入っていき感覚や振動を体感することができた
題材レポート (C)	教育的吟味としての教材研究	教師が活動の様子をしっかりと把握して、安全管理をすることはもちろん重要だが、子どもたちが活動の中で、道具の使い方に慣れ、適切に扱うことができるようになることも同じように重要である。
講義レポート (D)	客観的吟味としての教材研究	くぎ、木材、金づちといった材料や用具を適切に使う手立てを考えることも、本題材では重要な要素であると考え
題材レポート (D)	教育的吟味としての教材研究	教科書のめあての中には、「うつかんしょくをあじわいながら、形を見つけることを楽しむ。」とある。打つ面や角度によって手への振動の伝わり方や、音の聞こえ方が異なることなどにも面白さを感じさせたい。

表4は、教材研究に関するコーディングセグメントの一部を抽出して表にしたものである。

児童役の学生(D)の講義レポートでは「くぎ、木材、金づちといった材料や用具を適切に使う手立てを考えることも、本題材では重要な要素であると考え」という文書は客観的吟味としての教材研究に分類された。また、児童役の学生(C)の「釘を木材に打ち付けることを通して、釘が木材の中に入っていき感覚や振動を体感することができた」は、実際に手を動かして、釘を打つという行為が模擬授業内で設定されていたからこそできる主観的吟味としての教材研究である。

(2) コードマップを用いた視覚化することで見えてきた模擬授業の分析と考察

①教師役の学生の発話を中心にした分析から

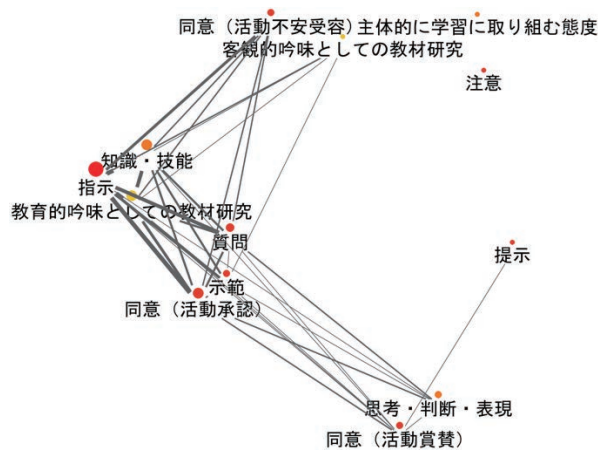


図1 教師役の学生の発話を中心にした分析のコードマップ

図1は模擬授業の教師役の学生(A)の発話を3つの分類コードで分析したものである。

ここでは、教師役の学生(A)の「指示」の発話が「教育的吟味としての教材研究」のコードと強く結びついており、それはまた、「知識・技能」の評価の観点にも強くつながっていることが顕著である。例えば、教師役の学生(A)が「それで、釘がしっかり木に刺さったら、次は頭から離れたところを持って、手首の力を使ってやって」という発話を取り上げる。これは、児童役の学生に丁寧に木に釘を打つコツを指示している場面で出された発話あり、十分に実際の児童のことを想定した丁寧な表現であり、「教育的吟味としての教材研究」として捉えることができる。

また、教師役の学生(A)は、「主観的吟味」に分類される教材研究としての発話は皆無で「客観的吟味」および「教育的吟味」に分類される発話のみ確認されたが、このことは、模擬授業と言えども、実際の児童を相手にしている教師としての自覚から、発せられた発話を中心になっていることを示している。

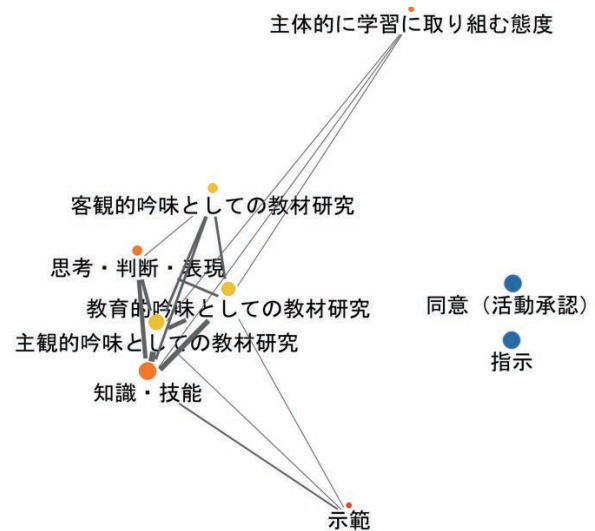


図2 講義レポートを中心にした分析のコードマップ

図2は、模擬授業後、1日以内に学生が提出した「講義レポート」を3つの分類コードで分類したものである。このコードマップによると、図4と同様に「教育的吟味の教材研究」が「知識・技能」の観点と結びつきが強いことが確認できた。例えば、児童役の学生(B)の「このように、くぎを木材に打ち付けることには、子どもたちが実際に体験しながら、材質等による小さな変化を感じ取ることができるという意義がある」の記述は、「知識・技能」を身につける内容であると捉えながらも、児童に対する「教育的吟味」の教材研究の大切さを示していることと捉えることができる。

また、「主観的吟味としての教材研究」に分類される発話が「知識・技能」の観点と強く結びついてるのが特徴的である。教師役の学生(A)は模擬授業の発話では発していなかったが、「打つ回数や釘の長さを変えるなどして、木から飛び出る部分の長さを変えたり、まっすぐ打つだけでなく、斜めに打ち込んで花びらを表現したりと表現が広がった」と「主観的吟味としての教材研究」に分類された記述をし、それは「思考・判断・表現」の観点に結びついてることを示している。

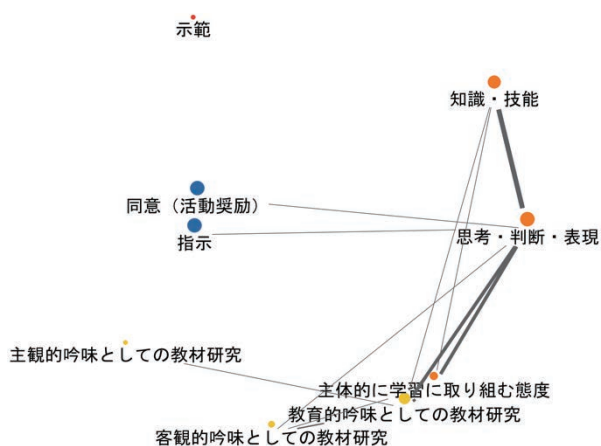


図3 題材レポートを中心にした分析のコードマップ

図3は、模擬授業から1週間後に学生が提出した「題材レポート」を3つの分類コードで分類したものである。ここでは、教師役の発話に関するコードで分類できたセグメントは確認できなかったが、評価の3観点に関するセグメントはどれも確認できている。したがって、模擬授業が児童に資質・能力をつけるために必要な要素を身につけさせているという自覚を学生に付けているということが確認できた。

また、「教育的吟味の教材研究」が「主体的に学習に取り組む態度」の観点と結びつきが強い点に特徴がある。このことから、児童役の学生を想定して指導することが、結局は児童の授業に対するやる気を引き出していることを模擬授業を通して理解していると捉えることができる。

#### IV. 研究の成果と課題

教師役でも児童役でも学生には、事前に「発話チェックカード」と呼ぶ前出の発話分析を確認できるカードを配布しており、その分類を自ら行うことの大切さについては理解させている。そのため、模擬授業では、「指示」や「示範」など児童役の「知識・技能」に関わる発話については、意識した上でやっていることがうかがえる。

最終的に授業後にすぐ提出させる「授業レポート」よりも「題材レポート」では、1週間という間を置いて提出させることで、「教育的吟味の教材研究」に関するセグメントが増えていることから、学生は自分が教師役ではなくても、児童の前に立って教える際にどのような配慮が求められるか、思いをはせ

ることが可能になるのである。

高詒淳一と瀬戸建は、久我直人の教材研究の捉え方<sup>21</sup>と高久の教材研究を比較して、最終的に、「教材の客観的吟味から主観的吟味、教育的吟味へという過程（教材研究）を辿ることで、『授業を想定した知識（pedagogical content knowledge）を獲得できるのではないだろうか』<sup>22</sup>と述べている。

したがって、本研究では、十分にその過程を辿ることを確認できた訳ではないが、1つの模擬授業でさえ、分析を行った結果、学生にとっての「教材研究」が質的に変化していることを確認でき、大学の講義内における模擬授業の成果が出ていると判断できる。本研究では言及できなかったが、教師役の学生が発話をしながら用いるホワイトボードの記述や模型、さらにはタブレットPC等を活用したICTを含む学習環境についても検証も進める必要がある。

今後は、これらの要素もコードとして加えてさらに綿密な分析を進め、学生が小学校教員として採用された後に、若手教員として授業力が発揮できる「授業を想定した知識」を身につけることができるよう教員養成を行うための方途を探りたい。

\*本研究の実施にあたっては、公益財団法人富山県ひとづくり財団 令和2年度高等教育振興事業（第3号）助成金の助成を受けて実施しました。

#### 註

- 1 平成26 - 28年度基盤研究C 26381187「教科学習に対する若手教員の授業力向上に資する基礎的研究～実技教科を中心に」
- 2 隅敦「若手教員の図画工作科授業力の向上を支えるために－実技教科としての位置づけを踏まえて－」美術科教育学会誌、『美術教育学第39号』美術科教育学会, pp.167-183. 2018
- 3 平成29 - 31年度基盤研究C 17K04757「若手教員の初年度授業力充実をめざす教員養成教育についての研究～実技教科を中心に」
- 4 隅敦「採用1年次の若手教員の図画工作科を含む実技教科授業の導入部における発話の有効性について」『美術教育学第40号』美術科教育学会, pp.217-235.2019 <https://www.gakken.co.jp/kyouikusouken/whitepaper/201908/chapter8/01.html>, 2021年9月26日取得
- 5 辰野千壽は、「授業力」について、「教師の指導力」

に位置づけた「教材・教具の作成や使用法，指導方法，指導形態，評価法などを理解し，子どもが効果的，能率的に学習するように指導，助言する能力」であり「学習指導能力」であると説明している。さらに，「教師の指導力」を，「生徒理解力」，「学習指導能力」，「学級経営能力」，「カウンセリング能力」，「地域との連携能力」と分類した上で，「学習指導能力」を「授業力」ともいうと位置づけていることから，本論文で論じたい授業内における教員の資質能力に限定している。辰野千壽「教師力とその向上」『指導と評価』第56巻4月号，2010年，pp.4-7。

- 6 授業を通して，児童生徒に『生きる力』をはぐくむ力」大坂府教育センター，2010年 <http://www.osaka-c.ed.jp/sog/kankoubutu21/jyugyokoujo/04-gaiyou.pdf> (2017年8月20日取得)
- 7 高久清吉「教育実践学 教師の力量形成の道」，教育出版，1990，p142
- 8 岩手県立総合教育センター，「校内授業研究の進め方Ⅱ」2008，<http://www.iwate-ed.jp/tantou/kyouka/seika/jugyouken/index.html>，2020年8月21日取得  
神奈川県立総合教育センター「小学校初任教師のための授業づくりハンドブック」2009，<http://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/kankoubutu/download/h21kankoubutu.html#20003>，2020年8月21日取得
- 9 若手教員の育成に関してを若手教員の配置された学校の校長以下指導者に問うたアンケートの選択肢に若手教員のそれぞれの経験年数において，最も重視する研修項目として「教材研究のすすめ方」が入れられているが，その内容については特に説明も無く，回答した指導者もそのまま各自の理解している内容で回答している。「指導者のための若手教員の育成を図る研修の手引」平成25・26年度愛知県義務教育問題研究協議会 中間報告書
- 10 高久清吉「教育実践学 教師の力量形成の道」，教育出版，1990，p142
- 11 前掲10，p143.
- 12 それぞれ「音楽科 模擬授業」，「図画工作科 模擬授業」，「家庭科 模擬授業」，「体育科 模擬授業」のキーワードで検索した結果。2021年9月26日現在

- 13 大野内愛「音楽科教員養成における模擬授業の傾向分析－導入部に着目して」『音楽文化教育学研究紀要』33号，広島大学大学院人間社会科学研究科音楽文化教育学領域，2021年
- 14 MAXQDA2020AnalyticsPro2020，ライトストーン社，2020年
- 15 佐藤郁哉「QDAソフトを活用する実践質的データ分析入門」新曜社，2008年
- 16 隅敦「若手教員の図画工作科授業力の向上を支えるために－実技教科としての位置づけ踏まえて－」『美術教育学—美術科教育学会誌第39号』美術科教育学会，2018
- 17

コード		セグメントの説明
指示		授業の中で児童がすべきことを示す発話
示範		用具の使用法等を実演しながら解説する発話
提示		参考作品になる児童の実技の様子を取り上げて見せながら指導する発話
質問		児童に対して指導内容の確認する質問を行う発話
注意		安全等に対する配慮が欠けた場合に指導する発話
同意	活動賞賛	児童の活動を認め，そのまま奨励する発話
	活動承認	児童の活動をそのまま受けとめるような発話
	活動奨励	児童の活動をそのまま認めた上でさらに励ますような発話
	活動不安受容	児童が自分の表現に迷っていたり，困っていたりしたときに子供と一緒に悩みながらも，結局解決策を示さないという発話

- 18 この授業では，授業の進め方を次のようにシラバスに示している。「1. テーマに基づく理論説明（約15分～0分）2. 模擬授業，（タブレット端末およびウエラブルカメラによる動画記録）と共に，（約30分～45分）板書の代わりにミニホワイトボードを使用 3. 動画記録を元にした振り返りと課題の共有および補足説明（約15分）\* 毎回模擬授業は，第1回におけるガイダンスを経て残り14回は班ごとに順に教師役と児童役を決めて行う。以下略」。授業時間外学修（事前・事後学修）については，「[事前学修] 模擬授業の教師役のは，指定された題材の板書計画（当日はホワイトボードが黒板代わり）と指導課程を検討しておく。その際に「発話チェックシート」を用いて，



主要な発話について確認する。また、講義日の前日までの昼休みに事前指導を行う。教師役以外の者は、教科書の該当ページを確認して題材の内容を把握しておく。最低でも約1時間の学修時間を確保すること。[事後学修] 授業で実施した教材研究を中心に、制作の過程の振り返りを行い、学習指導要領や教科書を再読し、各題材の意義について示した題材レポートを作成する。最低でも約3時間の学修時間を確保すること。

- 19 「学習活動の重点化等に資する年間指導計画参考資料」日本文教出版 [https://www.nichibun-g.co.jp/nenkei\\_reference/](https://www.nichibun-g.co.jp/nenkei_reference/)

20

コード		セグメントの説明
知識・技能	知識	金づちを使って木に釘を打ち、思い付いたものを表すときの感覚や行為を通して、形の感じ、形の組合せによる感じなどが分かっている。
	技能	金づちや釘、木切れを適切に扱うとともに、前学年までの材料や用具についての経験を生かし、手や体全体を十分に働かせ、表したいことに合わせて表し方を工夫して表している。
思考・判断・表現	A表現	形の感じ、形の組合せによる感じなどを基に、自分のイメージをもちながら、釘を打ちながら感じたこと、想像したことから、表したいことを見付け、表したいことを考え、形や色、材料などを生かしながら、どのように表すかについて考えている。
	B鑑賞	形の感じ、形の組合せによる感じなどを基に、自分のイメージをもちながら、自分たちの作品の造形的なよさや面白さ、表したいこと、いろいろな表し方などについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を広げている。
主体的に学習に取り組む態度		つくりだす喜びを味わい、進んで金づちを使って木に釘を打ち、楽しいものを表す学習活動に取り組もうとしている。

- 21 久我直人「教師の専門性における「反省的実践家モデル」論に関する考察(2):教師の授業に関する思考過程の分析と教師教育の在り方に関する検討」『鳴門教育大学研究紀要第23巻』2008, pp.87-100.

- 22 高詰淳一・瀬戸建「若手教員の実践的指導力の向上に関する教授学的研究:「教材研究」を基盤とした「待ち受け」の視点から」『上越教育大学教職大学院研究紀要第1巻』2014, p.67.

(2021年10月20日受付)